

2019（令和元）年度 神戸親和女子大学附属親和幼稚園学校評価について

神戸親和女子大学附属親和幼稚園は、2016（平成28）年4月に開設されました。

学校法人慈愛学園様より移譲され4年となり、神戸親和女子大学附属親和幼稚園として幼児教育の充実を目指して取り組みを進めてきました。経験年数の浅い教員集団ですので、まだまだ課題も山積しています。大学との綿密な連携の基にお互いに連絡をとりながら専門的な視点から意見を聞き「学校評価報告」を作成し、神戸親和女子大学附属親和幼稚園運営委員会において承認されましたので公表いたします。

学校評価表の項目といたしまして、「子ども一人ひとりの自立に向けた力を伸ばす」「子育ての支援」「教員の資質向上に努める」「特色ある幼稚園づくりを目指す」「家庭地域との連携」「情報を発信する幼稚園」「幼稚園経営」を掲げています。

さらに「重点目標」とその内容の「取組の状況・成果・課題」を経年的に記述しました。それらを評価し、「改善策」と「幼稚園運営委員会」でいただいたご意見を表記しています。

今年度、直接体験、考える体験ができる保育の工夫、環境構成に努めてきました。生き物に触れる。野菜の栽培や試食など豊かな感性を育む体験。試行錯誤ができる空間や時間の確保など自ら育つ環境構成のあり方についても工夫してきました。

また、教員一人一人の資質向上や保育の創造を目標に保育計画を立て、保育の展開、実施、振り返り（記録）等の保育実践の方法を試行錯誤してきました。研究保育の実施、公開研究会に参加することで保育のあり方、教師の役割、幼児理解など自分の保育を見直したり、保育の考え方などに変化が見られたりして、保育の大変さとともに保育の楽しさを感じていたように思われます。他の取り組みにおいても今までの方法がはたして最適なのかという視点で、見直し子どもたちにとって意味ある活動、育ちにつながる方法を模索してきた1年でありました。まだまだ、子どもたちにとって育ち合える環境づくりの途上にあるため今後も引き続き広い視野に立った保育の創造に努めていきたいと考えています。

毎年、神戸親和女子大学では「国際教育フォーラム」が開催されており、その際、海外からのフォーラム参加者の方々が来園され、さまざまな知見からご意見をいただいています。また、IALS 国際附属校園協会に加盟しておりますので、世界的に通用する幼児教育実践の場となるよう努めてまいります。

一人ひとりの命が輝くように子どもたちを大切に育て、保護者・地域・大学関係者等と共に連携しながら精進してまいりますので、今後とも神戸親和女子大学附属親和幼稚園に皆様のご理解とご支援を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

2020年3月31日
神戸親和女子大学附属親和幼稚園
園長 阪上素子

2019年度 学校評価報告書

神戸親和女子大学附属親和幼稚園
園長 阪上 素子

項目	重点目標	取組状況・成果・課題	評価	改善策	幼稚園運営委員会でのいただいた意見等
子ども一人一人の自立に向けた力を伸ばす	生活習慣の確立	うがい・手洗いの習慣化に加え、食後の歯磨きも習慣化できるように実施してきた。幼稚園では初めての取り組みで学年により安全に歯磨きできるように工夫して取り組んでいる。習慣化までには至っていない。水道の蛇口が人数に対しては少ないので使い方など工夫が必要となってくる。 挨拶や身辺整理など学年ごとに明確な目標を持ち、取り組んでいく必要性を感じた。	B	年少組はトイレの利用時にタオル掛けを近くまで、持っていく使いやすい環境を工夫していた。生活習慣が身につくためには繰り返し声をかけたり、大切さを伝えたりしていくことが重要となってくるので、教師の援助の方法を工夫していく。 基本的な生活習慣の確立は個人差が大きいので、個別に丁寧にかかわっていく。 子どもが自分で取り組みやすい、使いやすい保育室の環境構成を工夫していく。	生活習慣の確立は、重要なことであり、蛇口の数など施設設備について工夫を重ねていることを、むしろ評価したい。 環境の工夫は幼児の発段階を踏まえた構成がなされているのは良い。 教師の援助として個々の幼児を見ていく時、個々の幼児の課題を明確にしながら援助の方向や内容を見極めていく必要がある。 例えば、子供が何回でも行きたくなるような楽しい(?) トイレ環境にしていくことも大切である。
	命を育む体験・環境体験の充実	セキセイインコ、ウサギなど子どもが触れ合える小動物を身近に置いたことで、友達との会話が弾み生き物に関心を持ち、かかわる姿が多くみられるようになってきた。 テントウムシ、ダンゴムシ、カブトムシなど身近な虫を触ったり、観察したり、図鑑で調べたりなど自然と触れ合い、生き物に対して怖がらずに興味をもつきっかけとなった。 野菜の栽培、収穫したものをみんなで食べる経験を通して、苦手だったものが食べられたり、園庭で育てている様子に関心を持ったりなど普段食べている野菜についても興味を持ったり、野菜の話を取り上げたり野菜を身近なものに感じるきっかけとなった。	A	幼児期に直接体験を重ねることはこれからの育ちの中での非認知能力につながると考えられる。いろいろな感情体験や知恵につながる経験を計画的に保育に取り入れていけるよう教育課程にも位置付けていくことが必要である。 教師自身も子どもと共に経験することで新たに学び、身近な環境のとらえ方、活かし方など工夫していきたい。	小動物や昆虫が「生きる」「成長する」ためには、どのような営みが必要なのかを体験的に学ぶことは大切なことであると考えられる。昆虫などの「死」に直面した場合は、これも好機ととらえ、「死」からむしろ「生」の尊さを学べることを教員が理解している必要があると考える。 特に飼育、栽培することは、自分たちがその物の命を預かっているという意識を教師が明確にもち、援助していく必要がある。 野菜の栽培等も重要な学びであり、その取り組みについても、高く評価できる。
	幼児の主体性を伸ばす保育の実践	子どもが感じたことを試したり、伝え合ったりできる環境、意欲をもって、楽しみながら、遊びを通して学べる環境づくりを心がけてきた。遊びの取り組み方を継続的、主体的になるよう援助の在り方、環境構成の工夫をしてきた。保育の記録を通して保育を振り返り保育者自身の評価、子供の育ちを通しての評価など明日の保育につながる保育の進め方について考える保育に取り組んできた。	B	主体性とは何か、子どもが考え、学ぶとはどういうことかを考えながら保育を計画し、教師同士のディスカッションを行い広い視野で保育を実践していけるように園内研修の充実を図っていく。(学年研修・担当研修・全体研修など)	今年度、生活発表会に初めて参加させていただいた。これまでの比較を通した評価はできないが、クラスごとに企画された内容は、「主体性」「意欲」等を意識しながら参観させていただいたが、日常の子どもたちと担任の先生との関係性がうかがえ、信頼関係が構築されていると感じられた。

項目	重点目標	取組状況・成果・課題	評価	改善策	幼稚園運営委員会ですいただいた意見等
子ども一人一人の自立に向けた力を伸ばす	人権意識の向上	<p>子ども自身の思いを大切にした上で、相手の思いや気持ちに気づいたり、お互いにどうすればよいかを一緒に考えたりして、子ども達それぞれが自尊感情をもち、他者への認めにつながるような話し合いの場を持つよう心掛けてきた。</p> <p>子ども同士であるがままに受け止め、個性を尊重し合える仲間づくりを目指し、互いに注意し合ったり、高め合ったりできる関係を育んできた。</p>	B	<p>教師自身が子どもを固定概念をもって見ないように心掛け、一人一人をあるがまま受け入れられるよう心掛け、実践していく。</p> <p>個々の良さ、個性を理解し自己肯定感が育つクラスづくり、仲間づくりを行っていく。</p> <p>クラスの課題を全体の課題として取り上げ、職員全体で考える機会としていく。</p>	<p>重点目標の「配慮を要する園児への充実」は「特別な支援を必要とする園児への配慮の充実」あるいは「配慮を要する園児への保育の充実」ということである。</p> <p>インクルージョンの視点から、配慮を要する子供の保育を見直していただきたい。</p>
	配慮を要する園児への充実	<p>市の巡回相談（年3回）や、教育相談に加え大学より年間12回の臨床心理士による園内研修、保護者カウンセリングなどがあり子どもへのより深い学びに繋がっている。</p> <p>配慮を要する子どもや保護者にとっても相談窓口が広がり、三田市や療育施設との連携や情報交換で子ども達へのより深い理解・支援ができるよう環境が整ってきた。</p> <p>教師一人一人のスキルの向上に向けての研修の機会がもう少しあればと感じるところもある。</p>	A	<p>一人一人に適切なかわりをしていくためにも、医師や専門機関、大学との連携を充分にとよう心掛けたい。園全体で共通の方向性をもってかわりをしていく。</p> <p>バリアフリーに関しては大きな課題がある。</p>	<p>上記の内容とも関連するが、配慮を要する園児をクラスの中で中心に据え、障害のある園児とない園児が、互いに尊重できる集団づくりをしていくためには、意図的な取組が必要である。</p> <p>大学との連携を充分にとり、教師一人一人のスキルの向上に向けての研修会も意図的につくっていただきたい。</p>
子育ての支援	地域の子育て支援のセンター的役割	<p>預り保育としてのらっこクラスでは、異年齢の子どもがそれぞれ楽しめるような環境設定や、担当教諭を専任にしてクラス担任と情報共有し、クラス活動とは別の充実した時間になるよう工夫している。らっこクラス独自の活動や年間プログラム作成などにも取り組んでいきたい。人数の増加により、2グループに分割する日も増加してきた。</p> <p>「わくわく幼稚園」「なかよしクラブ」にも担当教諭によるオリジナルプログラム、大学や外部講師を招いての親子教室など多彩な展開で参加人数が定員を超える日も数回見られた。</p>	A	<p>らっこクラスでは今後も安全面に配慮し、リラックスできる環境、発達を保障したプログラムを充実させることが必要である。また、気になる子どもについてはその都度、相談に応じていきたい。利用者数が日によって違うことや増加してきていることで準備等難しいこともある。</p>	<p>「わくわく幼稚園」「なかよしクラブ」では、担当教諭によるオリジナルプログラム、大学や外部講師を招いての親子教室などの取り組みは評価できる。</p> <p>準備という点では、とても難しく、運営には苦慮されていると考える。今後、大学との連携や、大学からの支援が必要であると考える。</p>
教員の資質向上に努める	園内研修	<p>担任による週案、記録により、自分の保育を振り返る機会を持ち、保育力の向上に取り組んできた。</p> <p>研究保育を行い事後研修で協議をし、環境構成、進め方、子どもの見方、育ちについて学ぶ機会を持った。初めてのことが多く戸惑いもあったが、保育を振り返る機会になった。</p> <p>フリー教諭は子どもの育ち、内面の読み取り、課題について個人記録を取り幼児理解に努めてきた。</p>	B	<p>横並びでない保育を考えることに戸惑う1年だったと考えられる。新しいことを取り入れるにあたり難しさを感じている姿も見られたが、それぞれに今までとは違う手ごたえを感じている。明日の保育に続く記録の方法について検討していきたい。園の教育目標、教育課程の下、個性を發揮した保育の創造に向けて定期的に高め合える研修、他園を見学して学ぶ機会を作っていきたい。保育の楽しさが味わえるような研修会にしていきたい。</p>	<p>園（園長先生?）として、最も尽力してこられたのではないかと印象をもっている。保育園との合同研修会での教員の様子しかわかっていないが、園長先生の取組みを高く評価したい。</p> <p>ただ、「明日の保育につながる記録」の書き方を学ぶ研修を行っていただきたい。子どもの姿と保育の手立てを可視化するドキュメンテーションの記録方法も体験してほしい。</p>

項目	重点目標	取組状況・成果・課題	評価	改善策	幼稚園運営委員会でのいただいた意見等
	幼稚園と大学との連携	リズムジャンプ、造形、音楽など大学教員の指導により保育の考え方、進め方など保育の幅を広げることにつながった。 保育参観を行うことにより、本園の保育について理解を回り、向上に向けて指導いただくことができた。 運動会、音楽会、生活発表会など運営委員会の先生方、連携園の先生方とも意見交流することができ、今後の在り方を考える上参考となった。	B	各教員の資質向上とともに、大学教員との共同研究を行い、附属幼稚園としての役割を果たしていく必要がある。 幼稚園教育について理解が図れる方法を探っていく。 連携園との研修交流会の実施。	保育者と大学教員との共同研究を提案する。「子供の育ち」に焦点化して、お互いに学び合い、テーマを設定して共同研究に取り組むことが大切。 幼稚園と大学との連携という意味では、実習生の受け入れを活発にしていきたい。方法は一緒に考えていきたい。
	海外の方達との触れ合う体験	T i m先生の英語の時間だけでなく、イタリア・中国からの園訪問の方にその国の言葉で挨拶するなど、異文化に触れる機会に恵まれている。 園児の中に外国籍の保護者もおられ、自然な形で海外の方と触れ合う姿が見られる。	A	開園にあたって、米国やカナダの附属幼稚園、小学校をもつ大学で組織される「国際附属校園協会」に加盟している。 今後、子どもの自主性を重んじる世界基準の幼児教育の情報を共有し、世界を視野に入れた教育について、教師が学ぶことが重要である。	イタリア・中国からの園訪問等を通して、幼児期から国際感覚を身に付けていくことは重要である。
特色ある幼稚園づくりを目指す	音楽あそび	手作り楽器を作って音遊びをしたり、楽器に触れたりするあそびをした。初めて触った楽器の音に感激し、年長児の音楽表現は、歌詞の意味を理解し気持ちいろいろな鳴らし方を試したり友達と音をあわせて合奏したりする経験をした。	B	音楽の専門家の指導を受けることで、子どもたちは、歌ったり合奏したりすることが楽しくなってきた。継続的な指導が受けられるような環境づくりをしていく。 また、子ども自身が楽しく、夢中になって体を動かしているリズムジャンプは、体力向上につながっている。子どもたちの姿を踏まえて、今後、幼稚園の特色を具体的に教育課程に位置付けていくことが課題である。 英語は年長・年中は月2回、年少は3学期から月3回と経験してきたが、園の取り組みの特徴をしていくならもう少し回数を増やしていきたい。	これらの内容こそ、園のほうが大学の持つ教員や施設等の資源を、さらに活用する体制を組むことができればと思う。 各活動がどのように子どもたちの育ちに繋がっているかを検証し、その経過や結果等を実践記録としてまとめる事も今後の課題にして行く必要がある。 特色ある幼稚園づくりの一環として、「プロジェクト型保育」を実践してみてもどうでしょう。
	リズムジャンプ	4月三田市消防署の出初式で披露し、6月の運動会での発表に向けて、年長担任がリズムジャンプの研修を受け楽しみながら夢中で取り組んだ。11月には兵庫県女子体育連盟のダンス大会でダンスを披露した。年長児は取り組む度、リズムジャンプを通して体力が付き、粘り強く頑張る心や聞く力、課題解決に取り組む姿勢、挑戦する心など様々な学びにつながった。年長児の姿に憧れを抱く下の学年のお手本となった。			
	英語で遊ぼう	T i m先生の英語での絵本・音楽・体を使った表現で子ども達は英語の時間を楽しみにしている。保護者にも関心が高く保育参観の時間が増えている。 T i m先生のボランティアの保護者ランチタイムレッスンは大変好評である。			

項目	重点目標	取組状況・成果・課題	評価	改善策	幼稚園運営委員会でいただいた意見等
家庭地域との連携	子どもの生活や発達の連続性を踏まえた教育の推進	<p>クラス数が多いので保育参観の方法を工夫し、オープン参観とし、学期に1回以上保育中いつでも参観可能として実施した。日頃の姿を参観していただくことができ保護者からおおむね好評であった。運動会、音楽会、生活発表会では参加された方に感想カードを準備したことで、保護者の考えを生で聞くことができ保育の進め方、行事の持ち方など参考になった。</p> <p>親和っこだよりで幼稚園の考え方や気になることなどを保護者に伝えていくことができた。</p> <p>ゆりのき台小とは従来の交流に加えて、防災の視点から密に連携を図り、中学生のトライやるウィーク受け入れ・高校生の模擬授業など多彩な交流の場を持っている。</p>	A	<p>仕事しておられる保護者の方も参観しやすいように、参観予定を早めにお知らせできるように計画していく。</p> <p>幼稚園の取り組み、幼児期に大切なことなどを保護者に伝える機会を工夫していく。</p> <p>今後も、近隣の小、中学校、高校との連携を深めるため、幼稚園側からも積極的にアプローチし、交流の場を増やしていけるように努力する。</p>	<p>「家庭地域との連携」は「家庭・地域との連携」である。</p> <ul style="list-style-type: none"> 幼稚園の中に「しんわC a f é」を開店しては、地域の方、地域の子育て家庭の方、園児の保護者の憩いの場づくりとして。 小学校との接続教育の実践に取り掛かっていただきたい。まずは、アプローチカリキュラムの作成から。 <p>地域との交流の大切さを意識して活動を取り入れていることは高く評価できる。</p>
情報を発信する幼稚園	情報の積極的な発信の充実	<p>ホームページの更新回数、らくらく園児管理(ネット)の活用機会を増やして情報発信に努めた。元年度10月より新しいアプリを導入したことで情報確認できているかどうかわかるようになり使いやすくなった。今後も現状に合わせた発信方法、内容を工夫していく必要性を感じている。</p> <p>日々の保育の様子をドキュメンテーションとして、保育室に掲示し、こども達だけでなく保護者にも取り組みの様子がよくわかると好評だった。門の掲示板も増やし掲示内容を多彩にし、門外の掲示板の半分は地域に発信する場とした。</p>	A	<p>今後は、ホームページの更新を頻繁にしていこう努めた。</p> <p>貼りだした写真はドキュメンテーションとして積み重ねていきたい。</p> <p>門の外の掲示板の活用を図っている。</p>	<p>HPの円滑な更新は、かなり画像や内容について気を遣うという点で、日常的に安定して進めることは難しいのではないかと考える。教員経験は少ないがスキルのある教員を指名する等、組織的に対応できる体制があればと思う。</p> <p>このたびの新型コロナウイルス感染拡大についての対応策は、早い段階からホームページに更新していくことが重要である。</p>
幼稚園運営	安全管理・危機管理の徹底	<p>年間10回の避難訓練の実施はもちろん、園単体の安全管理だけでなく、地域との連携のもとでの防災対策にも取り組んだ。避難訓練終了後、人の配置や動きについて再確認し、警備員、運転手、教員で共有していった。避難時に使用する防災頭巾を購入してもらい新たにさす股2本を購入し、必要な個所に配置した。 月1回の地域の防災会議に参加、ゆりのき台地区の防災イベントに参加協力。地域団体との交流で情報の共有ができ、防災についてもより強固な関係作りができた。</p> <p>AEDを使った救命救急講習、エピペンの講習会への参加をなどを通して教職員全員が正しい知識と対策を身に着けるべく努力している。</p> <p>感染症予防のため手指消毒薬(アルボナース)を各階に配置する。</p>	B	<p>何よりも子どもの命を守るためには、今後も様々な状況を想定した避難訓練を実施したり、関係機関と連携をとり、実施訓練をしたりすることは重要である。</p> <p>保護者は送迎時に保護者証を身に付けるので、防犯対策の一環であることを意識付けていきたい。</p> <p>警備員の配置をし、安全管理を向上させている。</p> <p>発災時の危機管理マニュアル(乳幼児用品の備蓄も含めて)を作成すべきではないか。</p>	<p>危機管理、安全管理については、日常の保育の中で教師が意識していくことを明確に意識付ける必要がある。例えば、日々の保育の中で、ヒヤリハットな出来事を教師同士ので共有し安全管理の意識を向上していく事も必要である。</p> <p>大学の体制やノウハウを、もっと園に提供できればと考える。</p>